

呪いの眠り姫は

ヤンデレ騎士に夜ごと執愛される

プロローグ

ゆつくりと大きなてのひらで乳房を揉み込まれる。
そうされると淡いものが体の奥底から込み上げてきた。
心地よいのに、どこか焦燥めいた感覚をまとっている。
もしかすると、これが快感というものかもしれない。
ユイルの唇から、ほう……と淡い吐息が漏れた。

「気持ちいいか？　だが、これだけで終わると思うなよ」
オスカーはユイルの様子をつぶさに観察している。
不穏な台詞^{セリフ}になにがあるんだろうと思ったとき、鮮烈な感触が胸に走る。

「んんっ」

チュウッ……と濡れた音がして、きつく胸の突端を引き絞られるような感じがした。
雄々しい唇に乳首を挟み込まれ、吸い上げられている。
初めての苛^{かれ}烈な感覚に思わず眉根が寄る。

仄かな痛みのほかに、むず痒さを感じた。

吸い上げられるのが終わったと思うと、口中に含まれた突起をねつとりと舌で捏ね回された。温かい口中で唾液が絡み、執拗に舐め回される。濃厚な愛撫に体が昂り、ユイルの呼吸が荒くなる。

しかもオスカーは、もう片方の突起も同じように舌で愛撫した。

その最中にも彼の大きな手は両の乳房を掴み、緩く揉んでいる。

「ふ……ふう……んん」

気持ちいいのに、下腹が切なく疼いてもどかしい。

なぜか秘所から濡れたものが滴るような感じがした。

胸から唇が離れ、オスカーの手は腹へと伝い下りていく。

下腹の淫紋を、そつと指先が辿る。

だが彼は少し触れただけで、手は太腿へと下りていった。

どうやらユイルが眠っている間も淫紋は動いたり光ったりするような、変化はないらしい。

内心でほつとしていると膝裏を抱え上げられる。

両脚が大きく広がり、膝を立てせられた。

秘所がオスカーに丸見えになってしまう。

羞恥に塗れていると、いつもの傲岸な台詞が吐かれる。

「濡らしているな。まるで発情した雌猫だ」

彼の低い声で罵倒されると、恥ずかしくてたまらない。

見ないでと言いたいのに声にならないので、いつそうもどかしさが募る。

「んん……」

「舐めてほぐしてやる。雌猫といえども、初めての体に突き入れるのは、さすがに無理が生じるかな」

これからさらなる淫靡な愛戯が待っていると知り、ぞくりと体の奥底が疼いた。

——どうしてこんなことになったんでしょう……

ユイルはオスカーとこうなったきつかけを思い出していた。

第一章 淫紋に呪われた王女

カタン、と本を書架に戻す音が静謐な空間に響く。

「ふう……今日はこのくらいですね」

ユイルは愛しげに、書架に置いたばかりの本の背表紙を撫でた。

くせ毛の栗色の髪は広がりがちで、ぼさぼさになるのを抑えるために三つ編みに結っている。加えて極度の近視なので黒縁の眼鏡をかけていた。いつも目立たないベージュのドレスにエプロンをつけているため、どこから見ても凡庸な娘である。

ここ、アイレンベルク王国の王宮内にある図書館司書が、ユイルに与えられた役割だ。

ユイルヘルミナ・アイレンベルクは、王家の第一王女として生を受けた。

本来なら王女として大切に育てられるはずだが、とある理由により、生まれてすぐに離宮へ追いやられてしまった。

乳母に育てられ、家族とは稀に顔を合わせる程度。

一応は王女としての地位は存在しているのだが、ユイルは王族の儀式にいつさい顔を出すことを許されていない。

自分から王女と名乗りもしないし、周囲の誰もがユイルを王女として扱わなかった。

秘匿された王女――

それがユイルの宿命だった。

華やかな世界なんてまったく知らない。

王宮の舞踏会も、庭園でのお茶会も、親族の結婚式も、すべて噂を聞くだけだ。

もちろん殿方と恋をするとか、結婚なんて望みも抱けない。

興味がないかといえば嘘になるけれど、自分の宿命を考えたら仕方ないと諦めていた。

ユイルはもう二十歳になった。王族の子女としての結婚適齢期はとうに過ぎている。

双子の妹がいるのだが、ふたりとも十四歳のときに外国の王族に嫁いでいた。

妹たちには、ユイルにはある『忌まわしきもの』がなかったからだ。

下腹にそっと手をやったユイルは溜息を漏らす。

自分は恋も結婚も知らないまま、生涯を王宮図書館と離宮で過ごすのだろう。

けれど、そんなに不幸だとは思っていないかった。

不遇の身かもしれないが、ふつうの暮らしはできている。それに本が好きだから、図書館の司書として毎日を本とともに過ごしているのは心が落ち着く。

ユイルにとって司書は天職といえた。どれだけ心が寂しくても、本の世界に飛び込むと、そこには夢が溢れ、希望がある。無限に可能性のある物語を読んでいたら、いつの間にか気持ちが凪いで

いる。

今は竜を探しに行くファンタジー小説に夢中だ。

もつとも司書の仕事があるので、そちらもこなしながら読んでいる。

夕暮れの差し迫る図書館には、書架の隙間を縫って橙色の陽射しが射し込んでいた。

ユイルが歩き出そうとすると、自らの長い影を覆うように黒いものが被さる。

「おい」

重低音の声をかけられ、びくりとして振り向く。

そこには漆黒の堕天使のごとく、美麗と凶悪を兼ね備えた男が立っていた。

「オスカー！　びつくりするじゃないですか」

制帽から覗く漆黒の髪に、切れ上がった毗^{まばら}、アイスグレーの瞳は氷のごとく凍てついている。

すつと鼻梁^{びりょう}が通り、酷薄^{こはく}そうな薄い唇。彼を造形するパーツのすべてが美しく、刃のように伶俐だ。

しかも高身長なので威圧感があり、頑健な体躯^{たいく}を黒の軍装に包んでいる。

オスカー・ベルリヒンゲン大公は王族のひとりでユイルとは遠縁にあたり、幼い頃から顔見知りだった。

ほかの王族の子どもたちは冷遇されているユイルに近づこうとしないのに、オスカーだけはなぜか柵を乗り越えて離宮に踏み込み、ユイルにちよっかいをかけてきた。

毎日蟬の抜け殻を投げつけられては悲鳴を上げていたものだ。

きつと、ひとりだけ離宮で暮らしているユイルが物珍しかったからだと思う。

昔からオスカーはやんちゃな性質で、ユイルを馬鹿にした男子を殴るなどして、問題を起こしていた。

そんな彼もすっかり大人になり、二十四歳になった。今では軍部総長に就いている。

アイレンベルク王国には国を守護する軍部があり、勇猛な騎士たちが揃っている。

オスカーは軍部の最高指揮官である総長の役職のほか、永久騎士という名誉ある称号を賜っていた。

だがそれはユイルの侍女など、身の回りにいる人たちから聞いただけの話なので、彼がどれほど強いのか、総長がどれだけ偉いのかはよくわからない。

現在のアイレンベルク王国は周辺諸国と良好な関係を築いているので諍^{いさか}いもなく、平穏な日々が続いていた。それゆえ軍部は訓練や国境の警備などの任務がほとんどのため、オスカーも暇を持て余している。

だからこうして図書館に出入りして、ユイルと顔を合わせているのだ。

思わず飛び退いたユイルを、オスカーは獲物を見定める肉食獣のごとく見据えている。

「兎みたいな飛び跳ね方だったな。臆病者め」

むっとしたユイルは唇を尖らせる。

そうするとオスカーはアイスグレーの瞳を睥^すめ、いつそうこちらを睨みつけてきた。

いつも彼はひとこと多く、ユイルをけなしてくる。

今は栄えある軍部総長だというのに、オスカーはちっとも変わらない。

「なにか用ですか？」

「これ、読み終わったぞ」

オスカーは手にしていた分厚い書籍を差し出す。

それはユイルが薦めた小説だった。

なにかおもしろい読みものを貸してくれと頼むので、伝説の魚を追い求める漁師の物語をセレクトしてみたのだ。

こういった男のロマンを凝縮させた系統のほうが、彼も夢中になつて読めると思ったのだが……本を受け取りながら、ユイルは訊ねる。

「どうでした？」

「くだらない」

端麗な顔で冷たく吐き捨てられ、ユイルの顔が強張る。

もう少し言い方というものがあると思うけれど、オスカーにそんなことを訴えても無意味だとわかっている。

「ええと……それは、物語の内容がくだらないということですか？ それとも、この本を推薦して感想を求めたのがくだらないという……」

「両方だ。——で、次の本はどれだ」

ユイルの頬が引きつる。

くだらないなら読まなければいいのに、彼は足繁く図書館に通つてきては、ユイルの推薦する本を借りていく。

いったいなんのために読書しているのだろうか。

「軍部総長つて、くだらないと思ひながら本を読まないといけないくらい暇なんですか？」

「それでもない。なにかと忙しいんだ」

「じゃあ、どうしてわざわざ本を借りにくるんです？」

「俺の勝手だ。忙しいなら来るなど言つても無駄だ」

「来るなどと言いませんけど……なにを読んでもおもしろくないのかなと思ひまして」腕を上げたオスカーは書架に手をつく。

行く手を遮られる格好になり、臆したユイルの身が竦んだ。

彼の頑健な胸板を包んだ軍服が迫ってくる。

オスカーは背が高いので、間近に迫られるとユイルの目線は彼の胸の辺りになる。

炯々とした双眸でユイルを見下ろしたオスカーは、低い声を響かせた。

「おもしろくないとは言つていない。くだらなさとおもしろさは別物だ。そうだろう」

「そ、そうですか」

どうしてこんなに近づくのだろう。

おもしろいのなら素直にそう言えばよいのに、なぜかオスカーは脅すような態度を取る。

鼻先に迫っている軍服から、仄かな汗の混じった香りがする。

どきどきとユイルの胸が脈打つ。

それは恐怖なのか、男の匂いを嗅いだからなのか、自分でもわからなかった。

「俺は、おまえが推薦した本を読みたい。今はそれに対する感想がくだらないと言っただけだ」

「そうですか……。感想は自由ですからね。オスカーが納得しているならいいんです」

「納得している。だから読んでいるんだろが、この鳥頭め」

彼は悪態をつきながら空いたほうの手でユイルの三つ編みを摘まむ。

編んでいる髪を指先でいじられて、無残にほどけてしまった。

「あわわ……やめてください。くせ毛だから編んでいるのに、そんなにいじったらぼさぼさになります」

手を上げて遮ると、ぶつかった手から互いの熱が伝わる。

オスカーは双眸を細めたが、すっと手を離れた。

書架からも手を下ろし、一步身を引く。

眼前に迫っていた胸板が離れたので、ユイルはほつと息をついた。

悪態をついたり意地悪をしたりする彼が少し苦手だ。

けれど本当に嫌なこととはしてこないのです、オスカーを嫌いにならないでいる。

彼の手が離れたので、ユイルは慌てて踵を返した。

「次に読む本を探しますね」

「ああ。頼む」

書架の間の廊下を駆けていく。

そうすると、オスカーもそのあとをついてきた。

パタパタと駆けていくユイルの後ろを、オスカーは長い脚を繰り出して追ってくる。ふたりの姿

は、まるで兎とライオンのようだった。

夕暮れ時の図書館内は静まり返り、誰もいない。奥に辿り着いたユイルは、手に抱えていた本を所定の位置に戻す。それから、次に推薦するべき本を指先でなぞる。

オスカーは三日おきくらいに図書館に顔を出す。かなり読書のスピードが速いらしい。もっと分厚くて読み応えのある物語のほうがよさそうだ。

だが、この棚のほとんどの本を彼はすでに読んでいると気づいた。

しかも自分ではいつさい本を選ぼうとしないけれど、好みはないのだろうか。

隣に佇^{たず}んでいる黒い死神みたいな男を、ユイルは仰ぎ見た。

「オスカーはどんな物語が好きなんですか？」

「好みなどない。ただし、選ぶならおまえが読んだことのある本に限る」

「どうしてです？」

ユイルは眼鏡の奥の目を瞬かせた。
推薦するからにはできる限り読破した本を薦めるが、ユイルだって図書館の蔵書のすべてを制覇したわけではない。

人によって好みもあるから、冒険譚が好きとか、恋愛話がいいとか、意見を出してもらえると助かる。

オスカーは書架の上のほうを指差した。

「愚問だ。——おまえが今読んでいる本があつただろう。竜を探すだとかいう……あれだ」

「ああ、『メーベルリンクの竜物語』ですね。一卷はありますよ」

先日、読んでいる本について話したので、オスカーはそれを覚えていたのだろう。
ユイルが今読んでいるのは三巻なので、すでに物語の終盤だ。

この話は冒険や主人公の成長などが描かれている名作で、男女問わずに楽しめる。
ただ少し古い本だからか、借りる人が少なくなり、今は書架の上段に陳座していた。

オスカーの背丈の倍くらいある棚のため、ユイルは梯子に手をかける。

図書館は天井まで届きそうなほど書架が高く、至るところに梯子がかかっている。
図書館に登っていく、目的の本を取ろうとしたが、目測を見誤ったためか少し遠く、手が届かない。
もがいたユイルは片脚を跳ね上げて、腕を伸ばした。

分厚い本なので手に余り、すぐに取れない。

ひらりとスカートが捲れ上がる。

「おい、脚が見えるぞ」

オスカーの焦ったような声が下方から届き、はつとなる。

しっかりと本を手にしたユイルが視線を下げると、ぐらりと体が傾いだ。

「きゃ……！」

バランスを崩し、梯子から足を踏み外す。

落下して床に体を打ちつける衝撃を予感し、きつく目をつむる。

けれど弾力のある熱いものに包まれ、痛みは訪れなかった。

おそるおそる目を開けると、オスカーの強靱な腕に抱き留められていた。

しかも、彼を下敷きになっている状態だ。

落ちてくるユイルを受け止めたというより、オスカーの上に落下して彼を床に倒してしまつたらしい。

慌てたユイルはもがきながら立ち上がる。

「あわわ……すみません！ 怪我はありませんか？」

「それは俺の台詞だ。なんともないか」

「私はどこも痛くないです。オスカーこそ、私の下敷きになって腰を打ったんじゃないですか？」

身を屈めたユイルは彼の腰の辺りをうかがう。軍服に包まれている腰はとても広くて強靱そうだ。無表情のままオスカーは立ち上がると、弾みで脱げたのだろう軍帽を拾い上げた。

彼は怜悯な眼差しのまま、軍帽を被り直す。

「おまえを受け止めたくらいで痛めるような鍛え方はしていない」

つんとしてそう言うので、なんともないようだ。

ほつとしたユイルは転んでも離さなかった本を胸に抱きしめる。

オスカーは険しい双眸で言葉を継ぐ。

「誤解を招かないように言っておくが、俺はスカートの中を見たわけではない。脚が見えると指摘したんだ」

「……そうですか」

自分に責任はないと言いたいのかもしれない。

梯子から足を踏み外したのはユイルが悪いので、オスカーが声をかけたせいなんて言うつもりはなかった。

ユイルは手にしていた本を差し出す。

「本は無事です。どうぞ」

じつとこちらを見つめているオスカーは手を出さない。

目的の本なのに、どうしたのだろう。

ゆっくりと手を上げたオスカーは、ユイルの眼鏡のつるに触れた。

「ずれているぞ」

「あつ……すみません」

ちよいと指先で、ずれていた眼鏡を直される。

転んだときに外れかけたのだ。眼鏡が壊れなくてよかった。極度の近視なので、これがないとなんにも見えない。

眼鏡が助かったのはオスカーが抱き留めてくれたおかげだ。

彼に感謝の念が湧いたとき、手を下ろしたオスカーが本を受け取る。

フツと笑ったオスカーは口端を引き上げた。

「気をつける。愚図め」

銀色に輝く襟章えりしやうの残像を置いて、彼は身を翻すひるがえ。

一瞬でも感謝した自分が馬鹿だった。

やはりオスカーはユイルを見下して楽しんでいるのだ。そういうサディスティックな性質なのだろう。昔から意地悪だったし、大人になっても彼は変わらない。

先ほどは、梯子から落ちる直前の声かけについて必死に言い訳みたいなことを語っていたが、あれはユイルが怪我をしたときに責任を取られるのを恐れたからではないか。

ユイルの身になにかあったとしても、誰も気にしない。

秘匿された王女は怪我をしても、いなくなっても、王家にはなんの損失もない。むしろ邪魔者がいなくなつて助かったと、王である父や王太子の兄はそう思うだろう。

だからオスカーだつて気にする必要はない。それなのに、彼はどうして日陰者の自分にかまつてくるのだろう。

溜息をついたユイルは廊下を歩き、書架の陰から出た。

とうにオスカーは去っている。

司書室で本の整頓をしようとすると、カウンターにいた侍女のミアが声をかけてきた。

「ユイル様、オスカー様は帰りましたよ」

「あ……はい。さっき話しました」

ミアはユイルより少し年上の優しい女性だ。ユイルの侍女として、離宮での世話のほか、この王宮図書館でも仕事を手伝つてくれていた。王族や貴族たちから疎まれているユイルの数少ない理解者である。

「大きな物音がしましたけど、大丈夫でしたか？」

「梯子から落ちたんです。私が足を踏み外したんですけど、オスカーが受け止めてくれました。ふたりとも怪我はありませんでした」

軍部総長であるオスカーの功績に万が一でも傷がついてはいけけないので、念のために詳細を話す。するとミアは、にっこりと微笑んだ。

「ええ。物音がしたときに覗いたので、事情は承知しています」

「……えっ、見てたんですか？ どうして顔を出してくれなかったんです？」

見ていたのなら、なぜミアは黙つてカウンターへ戻つたのだろう。

不思議に思つて訊ねると、彼女は困つたように眉を下げる。

「おふたりの邪魔をしてはいけませんからね、ウフフ」

「はあ……？」

どうやら気を遣つてくれているようだが、オスカーとは恋人でもなんでもない。ただの幼なじみというだけだ。

ベルリヒンゲン大公であるオスカーは王国の南側の領地を所有している。

アイレンベルク王国は領地における諸侯の力が強く、国王に等しい権力を持つ。さらに軍部総長でもあるのだから、軍を牛耳^{ひきもち}っているのはオスカーといつても過言ではない。王女とはいえ冷遇されているユイルなんて、彼から見たら臆病な兎程度にしか思えないだろう。

実際に彼はいつもそんなふうに悪態をついてくる。

いたぶつて遊ぶのにちょうどよい相手というだけ。

でも、私には本の世界がありますから……

唇を引き締めたユイルは司書室に入る。

物語の世界に没頭しているときだけが、悲しさを紛らわせてくれるから。

王宮図書館の閉館時刻になり、本日の仕事を終える。

図書館が施錠されると、いつものようにほかの司書たちに別れを告げた。

「お疲れさまでした、みなさん」

「お疲れさまです、ユイル様」

館長のほか数名の司書たちで切り盛りしているが、図書館は王宮内にあり、王族か貴族などの関係者しか利用できないため、混雑することはほとんどない。いつも静寂に包まれた空間で、ひっそりと仕事をしている。

司書たちはユイルが冷遇されていると知っていても、それを指摘することなく、穏やかに接してくれるので救われている。

ユイルはミアとともに離宮への道を歩いた。

王宮の敷地の外れにある離宮はこじんまりとした屋敷である。

「ただいま帰りました」

挨拶をして玄関に入ると、乳母のハンネが出迎えてくれる。

「お帰りなさいませ、ユイル様。ミアもご苦労さま」

まるでふつうの家庭の母と姉妹のようだった。

ユイルは生まれたときに母から引き離され、離宮でハンネに育てられた。ハンネは母親に等しい

年齢なので、実の母親のように思ってきた。

王妃であるユイルの母は十年前に病気で亡くなっている。

ユイルは母が亡くなって葬儀を終えたことを、父から呼び出されて初めて聞いた。母の葬儀にさえ参列させてもらえなかった。

そのことをハンネとミアはともに悲しんでくれたが、ユイルはさほどの悲しみは込み上げてこなかった。それというのも、母の思い出はほとんどないからだ。

王宮でほんの少し顔を合わせたとき、母はユイルを目にすると汚物を見たように顔をしかめ、逃げるように身を翻した。もちろん母が離宮を訪れたことは一度もない。

離れていても母は娘を心配してしてくれるはず……というのは、ユイルの悲しい願望だった。だから母が亡くなったとき、その悲しい願望も終わりを迎え、実は安堵したのだ。

母が嫌悪を示したのも、原因はすべて自分にあるので責められない。

ハンネとミアがいてくれるから寂しくはない。

明るいうりビングに集まってみんなで夕食を取り、今日あったことを話す。

本来は王族と使用人が同じ食卓で食事などしないが、ふたりを用人とは思っていない。家族だから一緒に食べたいとユイルが申し出て、こうして一般の家庭と同じように過ごしている。

夕食はハンネの特製ビーフシチューだ。

大好物なのでユイルの匙が進む。

すると、隣のミアが嬉々として報告した。

「聞いてよ、ハンネ。ユイル様ったら、本を取ろうとして書架の梯子から落ちたのよ」

「まあまあ、お怪我はなかったんですか？」

驚いたハンネは、ミアとユイルを交互に見やる。

オスカーが絡んでいるので黙ってほしかったが、ミアはなんでも話してしまおう。

気まづくなったユイルはふたりを見ながら、ビーフシチューを啜^{すす}った。

「ないですけど……」

「それがね、オスカー様を受け止めたの！ ユイル様を抱き留めたかったから梯子に登らせたんじゃないかしら。あの腹黒大公はそれくらいやりかねないわ」

ミアの朗々と述べられた見解に、思わずビーフシチューに突っ伏しかける。

そこまで見ていたのなら止めてほしかった……

まさかオスカーがわざと梯子に登らせたなんて、そんなことはない。ユイルを抱き留めて怪我をしそうになったのは彼のほうだ。

「そんなことありませんよ……。腹黒大公って、ちよつと笑っちゃいますけど」

「でしょ？ オスカー様はいつも理由をつけてユイル様にちよつかいをかけていますもの。あれは絶対にわざとです」

片眼をつむるミアを、ハンネは叱りつける。

「ミアったら、大公殿下に妙な名前をつけてはいけませんよ。不敬です。ユイル様ですよ」

ふたりで「はい」と返事をして肩を竦める。

ミアが「腹黒大公」と言ったのを復唱しただけなのだが、ユイルまで怒られてしまった。

けれどこういったやり取りにも家族の団らんを感じるので、胸が仄かに温かくなる。

食事を終えると後片付けを手伝う。

ユイルはいつも食べ終えたあとの自分の食器を台所に運んでいた。

離宮には料理人はおらず、ほかの使用人もいないため、ハンネがすべての調理と掃除を担っている。ミアとユイルはその手伝いをする。

皿を受け取ったハンネは、流しで洗いながら声をかけた。

「ユイル様、お風呂に入ってくださいな」

「はい」

いつもの会話だが、ユイルはこの時間になると胸を衝かれる。

ユイルが風呂から上がると、ふたりは自宅へ帰ってしまうからだ。

当然だが本当の家族ではないので、ふたりとも王宮の近くにある自宅から離宮へ通っている。ハンネは夫と子どもがいて、ミアにも両親ときょうだいがいる。離宮には使用人が泊まれる部屋があるが、なにかない限り基本的には宿泊しない。

つまり、ふたりがユイルのそばにいてくれるのは、それが仕事だからである。

夜に、ひとりきりになると、その事実を痛感する。
溜息を押し殺したユイルはバスルームへ向かった。

エプロンを外してドレスを脱ぐ。ユイルが着ているドレスは貴族の淑女がまとうような豪華なものではないので、ひとりで脱ぎ着ができる。コルセットもつけていない。

シュミーズを脱ぐと全裸になる。

そうすると、忌まわしいものが嫌でも目に入った。

ユイルの下腹には真紅の紋様が刻まれている。

それは臍の下に横たわる鞭のようにも見えた。長さとしては中指ほどだが、少したわんでいて、棘のような模様が突き出しているので不気味に見える。

これこそが、ユイルが冷遇される証である。

なにも知らない人にはただの痣に見えるかもしれない。

だが、アイレンベルク王家の者にとつては重大な意味があった。

この紋様は伝説の悪女であるエレオノーラ女王の証なのだ。

エレオノーラは、遡ること三百年ほど昔のアイレンベルク王国の君主だった。

彼女は王位継承権を持つ王族を次々に抹殺して玉座に就くと、悪政の限りを尽くした。

国民から重税を搾り取り、周辺諸国に戦争を仕掛け、反対する者は処刑した。

女王の楽しみは処刑される罪人を眺めながらワインを飲むことだったという。

下腹に真紅の紋様があるエレオノーラは、それを駆使して人の心を読み、人間を操る能力があったそうで、国民からは密かに魔女と呼ばれていた。

エレオノーラが本物の魔女だったかは定かではない。

だが悪名を馳せた女王も、病に倒れて呆気なく命を終える。

王家の歴史書には病死と記されているが、もしかしたら反対派の手によって葬られたのかもしれない。

エレオノーラには王位を継がせる子どもがいなかった。

さらに継承者を定めていなかったため、彼女の死後、遠縁の王族をアイレンベルク家の養子に迎えた。

女王の悪政のおかげで国内は疲弊しきつてしまい、王家としての信頼を回復するのには多大な時間を要した。

それ以降、王家では不文律が語り継がれている。

体に赤い紋様を持つて生まれた者は呪われている――

国を滅ぼす悪女になるゆえ、排除せよ――

つまり、ユイルは悪女エレオノーラの生まれ変わりと思われる。

ユイルが生まれる前にも王家には同じような痣のある子どもがいたのだろうが、その存在は消されている。

死ぬまで存在を秘匿したか、もしくは処刑されたのかもしれない。

ユイルとしては自分が悪女になれるなんて思えないし、女王になって国を思うままにしようなんて考えは露ほどもない。政治のことなんてなにもわからなかった。誰かを処刑するなど、想像するだけでおぞましい。

それにこの紋様がエレオノーラの異能の源だったようだが、ユイルは人の心を読み取ったり、操ったりなんてできなかった。

単なる痣なので痛くもかゆくもないし、不思議な現象が起こったことは一度もなかった。

けれど王家の者は、悪女エレオノーラの象徴であるこの痣を忌避^{きひ}している。

これがある限り、ユイルは本当の家族から疎まれ続ける。

何度も擦り落とそうとしたが、もちろん洗っても落ちなかった。

「はあ……悪女の呪いでしょうか。地味な私なんか、エレオノーラ女王みたいになれるわけありません」

いつも下腹にある痣を見るたびに落胆する。

生まれたときに殺されなかっただけよかったともいえるが、せめて家族から疎まれない人生だったらどんなに幸せだったろう。

真紅の痣から目を背けたユイルは、バスタブに足を浸けた。

翌日は図書館で大がかりな蔵書の整理があった。

司書たちは総出で本の片付けに勤しんでいる。

本を手にかけていたユイルは、ふとオスカーとのやり取りを思い出した。

昨日日本を貸したばかりだから、今日は来ませんよね……

かなり厚みのある本なので、最後まで読むには三日はかかるだろう。

以前、あまりにも速読なので本当に読んでいるのかと疑って内容を訊ねたとき、延々とストーリーを語られたことがあった。

あの仏頂面で威圧を込められると臆してしまうが、彼の声が聞けないとなると、なんとなく寂しい気もする。

はっとしたユイルは、ふると首を横に振った。

別にオスカーに会いたいわけではない。いつもユイルを罵倒する言葉を浴びせ、意地悪な態度を取ってくるのに、どうして気になるのだろう。

きつと嫌いだから頭から離れないのだと結論づけて、作業を続ける。

しばらく司書室には書籍が擦れるかすかな音やページを捲る音が響いていた。

そのとき、金庫の中身を片付けていた館長が独りごちる。

「ああ、そうだ。王家室も整理しないといけないんだったな」

その言葉にユイルは顔を上げる。

王家室とは、図書館内にある一室のことだ。

そこには王家にまつわる大切な蔵書が保管されていて、王族しか入室できないきまりになっている。

ユイルは五年ほど前、司書に就任するときに父に連れられて一度だけ入ったことがある。狭くて薄暗い部屋はクローゼットのようで、仰々しく本が並んでいた記憶が残っていた。

「館長、私が王家室の本を整理しましょうか」

「そうだね。ユイル様にお願ひするよ。これが鍵だ」

老齢の館長は金庫から木箱を取り出す。

木箱の金具を摘まんで蓋を開くと、そこには王家の家紋を刻印した鍵が鎮座していた。

王家室を開くための鍵は厳重に保管されている。

普段は金庫に入れており、その金庫を開ける権限は館長にしかない。さらに鍵を使用できるのは

王族に限ると徹底している。

しかし王家室にあるのは本だけで、宝玉などの金品はない。

歴史書のような類いばかりだったはずだが、エレオノーラ女王の件などもあるので、後世の国民には知られたくない内容もあるのだろう。

渡された鍵を手にとると、ずしりとした重みがある。

真鍮製だが、陽の光に当たると妖しい煌めきを放った。

「では、行ってきますね」

「わたしもお手伝いしましょうか」

そばにいたミアに声をかけられる。

だが渋い顔をした館長がミアを諭した。

「ミア。王家室は王族しか入れないしきたりなんだ。錠を破った者は呪われる。そうでなくても、王様から叱られてしまうよ」

「そうでしたね。忘れてました」

微苦笑をこぼしたミアは肩を竦める。

司書室にいたみんなは朗らかな笑い声を上げた。

ここにいる司書たちは貴族もいるが、王族なのはユイルだけだ。

けれど、そもそも王家室の蔵書はさほど多くもなく、ひとりで作業しても時間はかからない。

「あとでミアに、部屋の様子を教えてあげますね」

「そうしてください。行つてらっしゃい、ユイル様」

ミアや司書たちに見送られ、鍵を手にしたユイルは司書室を出た。

錠を破った者は呪われると館長は脅したが、あれは言い伝えみたいなものである。

規則を守らなければならないため、興味本位で覗こうとするなど、アイレンベルク家の先祖が言い聞かせたのだろう。

広大な図書館を通り抜け、半屋外の渡り廊下を歩いていくと、端のほうに棟がひっそりと佇んでいる。

ここには滅多に人が来ない。

小さな棟の中には王家室のみがある。

古びた金属製の扉は、何者をも拒むかのような頑強さを醸し出していた。

堅牢な扉に空いている小さな鍵穴に、ユイルは鍵を差し込んだ。

カチリと音が鳴り、解錠される。

取っ手を引くと、ギギイ……と軋んだ音が響いた。

室内に足を踏み入れた途端に微臭かひくささが鼻をつく。

入り口近くの棚に燭台が置いてあったので、ユイルはそれに火を点した。

橙色の光が仄かに室内を照らし出す。

五年ほど前に見たときと同じく、クローゼットくらいの狭い部屋には石壁をくり抜いた本棚がぐらりと三方を取り囲んでおり、そこに蔵書が詰まっていた。本棚のほかには、石の台座が置かれている。窓はない。

この部屋自体が巨大な石を削って造っているため、内部はひんやりとしている。

まるで石棺いしぐわんのよう。

ぞくりと背筋が怖気立ったユイルは、さっそく端から手をつけようとする。

だがそのとき、ふと目に留まったものがあった。
「あら……これはなんでしょう？」

先ほどもちらと目に入ったが、中央にある石の台座は、おそらく本を置いて読むためのものだろう。ちょうど腰くらいの高さで、幅は本が二冊ほど置ける程度である。

そこに、長方形の箱がぼつんと置いてあった。

ちょうど本が収められていると思しきサイズだ。

箱には「禁書」と書かれている。

以前見たときはこんなものはなかった。王族の誰かが本棚から取り出して、しまい忘れたのだろうか。王族なら誰でもここへ入れるが、もちろん館長の許可が必要だし、そもそもあえて王家室の本を読むなんて人はいない。

禁書とはなんだろう。とてつもない秘密が書かれているのだろうか。

おそろおそろ箱に触れて確かめてみると、小さな錠前がついていたが、それは外れていた。

鍵が壊れているようだ。

蓋に手をかけると、すんなり開いてしまう。

箱の中には一冊の重厚な本が収められていた。

かなりの年代物のようなだが、カバーが精巧な模様の真鍮で縁取られているため、傷みはない。保存状態はとてもよかった。

「確認するためにも、捲らないといけませんよね……」

ユイルはつぶやいて表紙を捲る。

ページはすべて羊皮紙で作られている。おそらく三百年以上前の書物だろう。ぱらりと捲ると、冒頭に著者と思しき人物からのメッセージが記してあった。

『我が偉業を真紅の淫紋を持つ子孫に託す』

ユイルはごくりと唾を呑み込む。

真紅の淫紋——？

まさか、下腹の紋様のことだろうか。

確かに血の色をしているが、淫紋とはどういう意味なのか。

子孫に託すということは、この書物を記したのはユイルの先祖にあたる王族かもしれない。

悪女と謳われるエレオノーラ女王にも赤い紋様があった。

もしかして、エレオノーラ女王に関する内容だろうか。

どきどきと不穏に胸が脈打つ。

次のページを捲ったとき、不意に目の前が朱に覆われる。

「えっ……!？」

本が不気味に光っている。

驚いたユイルは思わず手を離れた。

しかし開いたページが閉じることはなく、まるで意思を持っているかのように真紅の紋様を浮かび上がらせた。

複雑な魔法陣にも似た真紅の紋様に目を奪われる。

刹那、室内が真っ白に染まる。

ぎゅつと目を閉じたユイルは、波動のような不思議なものを全身に浴びた。

眩い光に襲われたのを感じたが痛みはない。

おそろおそろ目を開けると、そこにはもとの静寂が広がっていた。

「今のは……？」

振り返ると、燭台の灯火は揺らいでいない。

まるで何事もなかったかのように、橙色の光は穏やかに燃えていた。

目を落とすと、本は閉じられていた。

夢を見たのだろうか。

けれど箱の蓋は開いているので、自分が禁書なる本を見ようとしたのは明らかだ。

怖くなったユイルは急いで蓋を閉じる。その箱を書棚の下段にある目立たないところに押し込

めた。

燭台の火を吹き消し、王家室を出る。重い扉を閉めて、元通りに鍵をかけた。

施錠されたか確かめる手が震えている。

そのとき、ぴりつと下腹に痛みを覚えた。

「んっ」

なんだろう。針で突いたような痛みがしたが、それは一瞬だった。もしかして、紋様になにかあったのでしょうか……

禁書のメッセージは紋様について触れていた。

あの模様みたいな赤いものはなんだったのだろう。そのあと室内が白い光に包まれた。下腹を確認しようにも、すでに廊下に出ているので憚られる。

それに痛みはもう引いているので、気のせいだったのかもしれない。

禁書なる本を捲ってしまった罪悪感が圧しかかり、胸が重苦しい。

ぎゅっと鍵を握りしめたユイルは司書室に戻った。表情が強張っているのが自分でもわかる。作業していたミアがこちらに気づき、顔を上げた。

「ユイル様、どうでした？」

「えっ……ええ……」

動揺していると、ミアは小首を傾げた。

「なにかあったんですか？」

今あったことを話してよいものか、迷いが生じる。

王家室の書物の内容は、王族以外には知られてはいけない。

だからこそ王族しか入れないのだ。

あのメッセージも、謎の光を浴びたことも、相談するなら王族にするべきだろう。

それに、ミアに余計な心配をかけさせたくなかった。

「……なんだか幽霊が出そうな陰気な雰囲気で、怖くなりました」

「あはは、王家室は石造りだから棺桶みたいですもんね」

「そ、そうなんです。中に入ると閉じ込められるみたいな感じがして……」

どうにか誤魔化したようだ。

穏やかな笑みを浮かべた館長は、鍵を収納しておく箱を取り出す。

「お疲れさま、ユイル様。みなでお茶にしようかね」

「は、はい」

室内の様子はここにいる誰も知らないもので、作業について質問されることはなかった。

あの禁書の存在も、館長ですら知らない。

ユイルは元通りに真鍮製の鍵を箱に戻す。

それを館長は金庫にしまっていた。

これで禁書は二重に施錠されたことになる。

どきどきと胸が高鳴るのは、秘密を抱えた緊張感からだった。

休憩のお茶のため、司書たちは作業の手を止める。

ユイルも休憩するテーブルへ向かおうとしたとき――
くらりと視界が回る感じがした。

「え……」

なぜか目の前がぼやけている。

気分が悪いわけではないが、目が霞んだのだろうか。
つるに触れて眼鏡を外す。

ユイルは目を瞬かせた。

裸眼になると、世界は綺麗に輪郭を伴っていた。

もう一度眼鏡をかけてみると、やはりぼやけている。

極度の近視のはずなのに、突然視力がよくなったというのか。

まさか、あの禁書から放たれた、謎の光を浴びたからなのか。

眼鏡を手にしたユイルは呆然とした。

その日の夜、バスルームで裸になったユイルは愕然とした。

「えっ……!？」

かろうじて悲鳴を上げるのはこらえた。

自らの下腹の痣が大きく形を変えている。

これまでは少々湾曲した棒状の線だったのに、複雑な紋様に変化していた。

蔓のようなものが絡み合う左右対称になった模様は偶然できたとは思えないものだ。

まるで広がった魔法陣のよう。

はっとしたユイルは、この紋様が昼間見た禁書のものと同じだと気づく。

あのとき、真紅の紋様が本から浮かび上がっていた。

「まさか、あれが移った……?」

そのあと部屋から出たとき、下腹に小さな痛みを感じた。

あれは下腹の紋様が広がっていたからなのか。

禁書のメッセージには、『我が偉業を真紅の淫紋を持つ子孫に託す』とあった。

この模様の名は正しくは、淫紋というのかもしれない。

王家の先祖はユイルになにかをさせようとしているのだろうか。

そっと淫紋に触れるが、なんともなかった。痛みはなく、これ以上広がるような気配もない。

しかし淫紋のほかにも、ユイルの体には明らかな変化があった。

鏡の中の自分を目にして、ごくりと唾を呑み込む。

突然視力がよくなったので、眼鏡は外していた。

それだけでなく、髪質が変わったようなのだ。

三つ編みをほぐくと、いつもはぼさぼさのはずのくせ毛がさらりとしていた。

色まで変わり、栗色だった髪は黄金のように輝いている。

いつの間にこうなったのかわからないが、誰にも指摘されなかったので、微々たる変化なのかもしれない。それか、光の加減によって見え方が異なる可能性もある。時間が経つごとに刻々と自分の体が別物に塗り替えられていく。

いったい、この身になにが起こっているのだろう。

恐ろしくなったが、今のところ痛みがあるわけではない。

淫紋は形を変えただけだ。痣は皮膚に刻まれているので、形状の変化だってありうる。それに視力がよくなったたり、髪が綺麗になったりするの嬉しいことだ。

他人からしたら、なんの問題があるのかと呆れられてしまうだろう。

こんなことで騒ぎ立てたら、ハンネとミアを心配させてしまう。

なにより、王家室の禁書を見たことが明らかになるのが怖かった。

ひとまず誰にも報告せず、黙っているしかない。

でも、これ以上にかあつたら……

不穏に鳴り響く胸を押さえたユイルは、もう下腹の淫紋に触れなかった。

就寝する時間になると、窓の外からフクロウの鳴き声が耳に届く。

ハンネとミアはすでに帰宅しているので、離宮にひとりきりだ。

自室で髪を梳すいていたユイルは、鏡の中の自分に溜息をこぼした。

「やっぱり、髪が変わっていますよね……。誰かからなにか言われたら、染めたということに……して……」

ふっと、手から力が抜ける。

ユイルはブラシを取り落とした。

なんだろう。頭がぐらつとする。

猛烈な睡魔に襲われる。こんなことは初めてだ。

どうにか立ち上がり、よろけながらベッドへ向かう。

寝台に倒れ込むと、なぜか体が熱いのについた。

「うう……ん」

風邪のときの症状とは違う気がする。

なんだか体内が疼く感じがするのだ。

身のうちで暴れているものを掻きむしりたい衝動が湧く。

それなのに眠くてたまらない。

猛烈な睡魔に襲われ、すうっとユイルの意識が沈んだ。

けれど浅い眠りにたゆたっている。

なぜか自分の体の状態が自覚できた。

淫紋が熱い――

疼いてたまらない。体内に太いものを押し込んで、思いきり突いてほしい。

卑猥な望みが湧き出てくるが、眠っているため指一本動かさない。

ユイルの秘所から、とろりと花蜜かみついたが滴り落ちる。

「う……ん、ふ……っ」

淫紋はさらに熱を帯びる。

眠りは浅く、今にも覚醒できそうなのに、なぜか瞼を開けない。

ふると体を震わせることしかできなかった。

切ない疼きに身を焦しながら、ユイルは浅く息を継ぐ。

秘所からはとろりと愛蜜がこぼれていた。

ふっと意識が浮上して、瞼を開ける。

いつの間にか寝てしまっていたようだ。

はっとしたユイルは体を起こした。

室内に目を向けるとまだ薄闇に沈んでいる。カーテンから一筋の光が射し込んでいるので、ようやく夜明けを迎えた時間だとわかった。

昨夜は眠りながら体が疼いていた気がする。まるで発情した雌のように、自分は雄に貫かれるこ

とを望んでいた。あれは夢を見たのだろうか。

「淫紋は……!？」

ネグリジェを捲り上げて下腹を確認する。

あれほど熱を帯びていた淫紋だが、今はさほどでもなかった。だが体の疼きは消えたわけではなく、熾火おきびのごとく燻くすぶっている。

それよりも秘所からこぼれた蜜液が、ぐつしよりとネグリジェを濡らしていた。

「えっ……こんなに……?」

ユイルは男性経験はないものの、性教育は受けている。勉強は家庭教師から学んでいた。

その知識によると、女性は性的な快感を得たとき、大量に淫液を溢れさせるといふ。

今までも月のものの影響なのか、淫液が少々漏れ出ることはあったが、こんなに多いのは初めてだ。

つまり昨夜は男性との性行為を求めて、こんなに濡らしたということなのか。

自分にそんな願望があるなんて考えられず、ショックを受けた。

秘匿された王女である自分は、恋も結婚もできずに生涯を終えるしかないと思っていた。性的な喜びなんて想像すらしなかった。

これも淫紋の影響だろうか。

とてつもない睡魔に襲われ、浅い眠りの中で体が疼いていたせいで、なんだか寝不足だった。

目を擦^すっていたそのとき、ドンドンと玄関の扉を叩く音が響く。
びくりと肩を跳ねさせたユイルはベッドから転げ出る。

まだ早朝なので、ハンネとミアは来ていない。

おそらく王宮の人だろうけれど、こんなに朝早くからなんの用だろう。

「は、はい」

寝室から廊下を通って玄関へ向かい、扉を少しだけ開けた。訪問した人物を確認する。

誰かと思ったら、王太子の側近である従者だった。

兄のダニエルは稀に使いをよこすので、従者とも顔見知りではある。

「ユイルヘルミナ様、王太子殿下がお呼びです。お支度してください。言わずもがな、殿下はあなたとの面会を快く思っておりませんので——」

淡々と事務的に述べていた従者は、言葉を切る。

ダニエルからなんらかの用事があるらしい。

そういえば王太子妃になる令嬢が決まったと噂に聞いたので、それについて話があるのかもしれない。

もちろんダニエルもユイルを忌避しているので、誰にも見られないうちに話をしてすぐに帰らせるため、早朝に呼び出すのだ。

ユイルは名ばかりの王女、王太子からすれば朝早くからの呼び出しも、ネグリジェで玄関に来さ

せるのも無礼でもなんでもないらしい。

「はい、わかっています」

返事をする、なぜか従者は目を見開いた。

どうして驚いているのだろう。

「あの……どうかしました？」

そう問いかけた瞬間、ガツと従者は玄関扉に手をかけた。

力を込めて扉を押し開けようとしている。

彼の目が虚ろなのに気づいたユイルは恐れが湧き上がり、咄嗟に扉を閉めた。

「すぐに王宮へ行きます！ 伝令は承りましたので帰ってください！」

扉に施錠して大声で伝える。

すると扉の向こうから「ええ……」という、ぼんやりした応えが返ってきた。

足音が遠ざかっていく。従者は王宮へ戻ったようだ。

今のはなんだったのだろう。

ユイルは首を捻ったが、自らの格好を見下ろしてはつとなる。

眠りが浅かったせいaka幾度も寝返りを打ったらしく、ネグリジェが乱れている。

胸は見えていなかったが、かなり皺^しが寄っていた。

それに秘所が濡れているから、匂いがしたのかもしれない。

従者は三十代くらいの男性なので、そういったことで興奮したのだろう。慌てて着替えたユイルは昨夜の痕跡を消した。

いつものベージュ色のドレスに着替えてエプロンを身につける。

髪を三つ編みにして、普段と変わらないように見せるため、少しぼさぼさにした。

眼鏡をかけると逆に見えるから、今日は置いておく。

「これでいいですよね……」

ほとんどいつもと変わらない見かけになった。

離宮を出たユイルは、まだ朝靄が残る林の中を急ぎ足で歩く。

林を抜けると、眼前に荘厳な王宮が現れた。

離宮のある林は敷地の裏手にあるため、王宮へ入るときも裏口を通る。

もとよりユイルは王宮の正面玄関から入ったことなどない。

ユイルの格好も王女ではなく、どこから見ても下働きのメイドにしか見えない。

裏口は人ひとりが通れるくらいの扉だが、警備のために兵士が佇んでいる。

「おはようございます。ユイルヘルミナです」

挨拶をして扉に手をかける。

何度か通ったことがあるので慣れているし、兵士はいつもユイルに見向きもしない。秘匿された

王女の実在は、王宮にいる誰もが知っている。

ところが今日は勝手に違っていた。

兵士は驚いたように目を見開き、ユイルの肩を掴んでくる。

「ちょっと待て……ユイルヘルミナ王女……」

「えっ……？」

ユイルが王女ということを知っていても、誰も敬称をつけない。それなのにどうして突然そんなふうと呼ぶのだろう。

しかも兵士はユイルの肩を強く掴み、引きずろうとする。

「な、なんででしょうか？」

「こっちに来い、ちょっとだけだ」

ユイルが通る寸前までは平静な顔をしていたのに、兵士の目つきが虚ろになっている。先ほどの従者と同じだ。

不審なものを覚えたので、思わず声を上げる。

「わ、私は王太子殿下に呼ばれているんです。すぐに行かないと！」

「……王太子殿下？」

ぼんやりとつぶやいた兵士の力が緩む。

その隙にユイルは兵士の手を振り払い、扉を開けた。

廊下に滑り込んで足早に駆けていく。後ろを振り返るが、兵士が追ってくる気配はない。

なんだったのだろう。

今の格好はいつもどおりで、先ほどの従者のときのように男性を誘惑するものではない。だが、ふたりはまるで扇情的な格好をした娼婦が目の前にいるかのように、性的な目的で近づいてきた気がする。

それとも思い過ごしだろうか。これまで男性からそんなふうに見られた経験がないので違和感がある。

首を捻りながら王宮の階段を上り、王太子の自室の近くまで行く。

兄からは妹と認められていないので、ユイルは王太子の部屋に入ることは禁じられている。

近くのメイドの待機部屋に顔を出すと、数人のメイドがテーブルを囲んで作業していた。

「ユイルヘルミナです。王太子殿下に呼ばれて来ました」

「はい。廊下でお待ちくださいね」

ひとりのメイドが平静に返事をする。

ダニエルとはいつも廊下で会い、一方的に用事を伝えられるだけなので、メイドはそれを承知している。

彼女は立ち上がると、ダニエルの部屋へ向かった。

ほかのメイドは手元から目を離さない。

先ほどの従者や兵士のような反応は見られなかった。

やはり思い違いだったのだろうか、ユイルは内心で首を傾げる。
廊下に佇んで待っていると、すぐにメイドが王太子の部屋から出てきた。
それに続き、ダニエルが姿を現す。
金髪に碧眼（へきがん）という麗しい容貌のダニエルは、華やかなフリルのついた純白のシャツを身にまとっていた。

優美に髪を掻き上げる仕草は、物憂げな貴公子そのものだ。

しかし彼もユイルを忌み嫌っているため、彼女を見て亡き母と同じように綺麗な顔をしかめた。

ダニエルは汚いものを避けるかのように、ユイルを斜めに見やる。

「忌み子に伝えなければならぬことがあるから呼んだのだ。本来ならおまえが王宮に足を踏み入れるなど許されないのだぞ」

「そのとおりです。王太子殿下」

ダニエルからは「忌み子」と呼ばれ、ユイルは名前で呼ばれたことがない。

ユイルが兄と呼ぶことも禁じられていた。

悲しく惨めな気持ちになる時間だ。

用を聞いたらすぐに王宮を去りたかった。

うつむいたユイルは、できるだけ存在を消すために身を小さくする。

ダニエルは刺々しさを含めた声音で、淡々と語り出した。

「来週のお披露目パーティーで、わたしの婚約者が正式に発表される。無論おまえを婚約披露パーティーに招待などしないが、婚約者のクリスティーン嬢が王族に席を連ねるにあたり、忌み子の存在を知らせなければならぬ」と――」

王太子妃となる令嬢はクリスティーンという名前らしい。

おそらく高位の貴族なのだろう。彼女は王族の一員となり、親戚になるので、ユイルと顔合わせをしなければならぬ。

でもきつと、ちらりと廊下で挨拶するくらいではないだろうか。

そう考えていたとき、ダニエルが言葉を切った。

沈黙が続いてユイルはふと顔を上げる。

「王太子殿下？」

ダニエルは呆然としてこちらを見ていた。

つい今まで顔を背けていたのに、まっすぐにユイルに眼差しを注いでいる。

「……美しい。ユイルヘルミナ」

「えっ」

兄に初めて名を呼ばれた。

彼がユイルの本名を知っていたとは驚きである。

しかも今、こちらに向けて「美しい」と言ったのか。

驚きとともに、恐れが湧き上がってきた。

ダニエルの紺碧こんぺきの双眸は虚ろな色を浮かべている。

先ほどの従者や兵士と同じだ。

思わず後ずさりすると、長い脚で瞬く間に距離を詰めてきたダニエルに腕を取られる。

「すまなかった、ユイルヘルミナ。大切な妹を廊下に立たせておくわけにはいかない。わたしの部屋へ行こう」

「えっ……でも、あの……」

急に態度を変えたのでどう答えたらよいのかわからない。

ユイルは引きずられるようにして王太子の部屋に入る。

室内は豪華な装飾に彩られていた。精緻せいちな柱や天井のレリーフが美しい。

瀟洒なソファやテーブルが置かれ、窓からは明るい陽射しが降り注ぐ。どうやらここは応接間のような。王太子の居室は豪華で、いくつもの私室があるらしい。

強引に肩を掴まれ、ソファに座らせられる。

羅紗らしゃ張りのソファはとても座り心地がよいはずなのに、ユイルの胸中は戸惑いと不安が占めていた。

ダニエルは自らも隣に腰を下ろすと、間近からこちらを見据えてくる。

「わたしの部屋で過ごすといい。紅茶とケーキを……いや、朝食がまだだったな。ここに運ばせる

から、そのあとでお茶にしよう」

「いえ、けっこうです……。王太子殿下の婚約者のお話ではなかったんですか？」

「あー……それは、まあいい。それより王太子殿下などと他人行儀に呼ばないでくれ。わたしとユイルヘルミナは兄妹きょうだいだろう。お兄様と呼んでくれ」

ユイルは啞然あぜんとした。

これまでユイルを妹なんて露ほども思っていなかったはずなのに、いったいどうしてしまったのだろう。

なんのきっかけもなかったのに突然兄の考えが変わるなんておかしい。

はっとしたユイルは、淫紋が変化し、自分の外見も変わったことを思い出した。

変わったのは、自分かもしれない。

もしかして、私が男性たちを操っている……？

呪われた痣を持って生まれたために、ユイルは冷遇されてきた。

これまでは何んの効力もないただの痣が、昨日の王室での出来事をきっかけに、淫紋へと変化している。

エレオノール女王には人の心を読み、人間を操る不思議な力があつたと言い伝えられている。それゆえに彼女は魔女だと噂されていたのだ。

まさかこの淫紋が女王と同じもので、魔女の異能を使えるようになったのか。

ユイル自身はダニエルやほかの男性たちになにもしていない。

もしかすると、彼らが突然近づいてきたのは、淫紋の魔力に引きつけられたのではないか。

しかしダニエルが強引に迫ってきて思考を中断される。

「ユイルヘルミナ……怒っているのか？ これまでのことは謝る。わたしはどうして妹を遠ざけるようなまねをしていたのだろう。これからは王宮と一緒に暮らそう」

ダニエルは頬にキスしそうなほど顔を近づけてくる。

さりげなく距離を取ったユイルは上目で彼の様子をうかがった。

「それは私が呪われた痣を持って生まれてきたからじゃないですか。エレオノール女王のような悪女になって、国が滅びるのを避けるためですよ」

「あれはお伽話おとぎばなしみたいなものだ。ユイルヘルミナが誕生したとき、わたしはその場にいたが、父上と母上は赤子の痣を見て大変な嘆きようだった。悪女の生まれ変わりだとまで騒ぎ立て、殺す案も出た。だがベルリヒンゲン大公が猛反対し、おまえを離宮で育てることになった」

初めて兄の口から過去が語られたので、ユイルは瞠目する。

そんなことがあつたとは知らなかった。ダニエルはユイルより六歳年上なので、当時の記憶が鮮明に残っているのだろう。

乳母であるハンネも、もちろん当時を知っているだろうが、彼女はユイルがショックを受けないように詳細を伏せていたに違いない。